経済学におけるオルテガ

Ortega y Gasset in Economics

木　下　智　統

Tomonori KINOSHITA

１．はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット（José Ortega y Gasset 1883-1955）は，日本でもその名を知られた20世紀のスペインを代表する哲学者，思想家である。彼の著作は祖国のみならず，ヨーロッパやアメリカ大陸においても積極的に受け入れられ，特にドイツにおける名声は確固たる地位を築くまでに至った。そのため，ドイツ哲学が主流となっていた，当時の日本にもオルテガの思想は早い段階から導入された。

オルテガの思想が日本で紹介されて以降，現在に至るまで数多くの研究書，研究論文等が発表されてきたが，その内容は哲学，思想，歴史学，社会学，教育学（大学論），芸術，文学，経済学，人間学，そして倫理学などの多領域に亘っており，オルテガ思想の広がりを裏付けるものとなっている。

このような広がりを持ったオルテガ思想の範囲のうち，本論考では，特に経済学における受容に焦点を絞り，経済学者，西部邁をその主たる考察対象として扱った。

総じて，本論考は，経済学におけるオルテガ思想の受容について考察をすすめることにより，日本におけるオルテガ思想の受容に新たな一面を加えることを目的としている。

２．日本におけるオルテガ思想の受容の特徴

日本におけるオルテガ思想の受容は1933年から開始され，それから80年あまりたった現在，数多くの研究書，研究論文，解説書，そして翻訳等が刊行され，オルテガはスペインの哲学者としては唯一，一般化した存在としてとらえられるだろう。ここに至るまでのオルテガの思想受容については，1933年から現在までをそれぞれ節目となる年数を軸として四つの期間に分け，丹念な検討を行ってきた[1)]。こうした時間軸を基とした検討は，オルテガ思想受容の過程が各期間の時代風潮や学問状況とも密接に関係していることを確認する作業であった。また，オルテガと向き合った人々の思想変遷を辿っていく作業でもあった。そして，こうした検討の結果，オルテガ思想の受容は幾多もの学問分野にまで広がっていることが確認された。それらの内容は哲学，思想の分野のみに限定されることなく，実に多岐にわたっており，オルテガ思想の幅広さを裏付けるものとなっている。

だが，彼の思想が導入される初期段階からその幅広さ，その奥深さゆえに一つの学問分野に留まるものではなく，いくつもの学問分野に及ぶことはオルテガ導入の初期段階から

1）「日本におけるオルテガ思想の初期受容　―その過程と要因に関する一考察―」をはじめとする拙稿を参照のこと。

指摘されていたことであった。初期オルテガ研究の中心人物であった，池島重信はそうした指摘を最初に行った人物である。

> オルテガは歴史を決定したあらゆる芸術作品に対して行き届いた理解を示す一方，晦渋と言われているドイツの精神科学に対しても精密な知識をもっている。また深奥を誇る東洋思想への悟入があるかと思えば，感性の極致を誇るフランス文化に対する味解も容易に他の追随を許さぬものがある[2]。

池島が上記のように述べていた段階では，オルテガに関する研究は，皆無に近く，数本程度が確認できるのみであった。つまり，池島はさまざまな要素からオルテガを「文化の全体把握の達人[3]」としてとらえたのではなく，オルテガの著作にふれた実感としてこのような発想にたどり着いたのである。そしてその後，オルテガの著作にふれた人々は同様の実感を持った後，それぞれの分野においてオルテガ思想の受容を開始するのであった。

現在までにオルテガの思想受容が確認できる主な分野として，哲学，思想，歴史学，社会学，教育学（大学論），芸術，文学，経済学，人間学，そして倫理学などがあげられるが，明確な学問分類が困難なものもあるため，さらなる検討が必要であろう。いずれにしても，オルテガの思想が日本において，幅広い分野で時間をかけ，少しずつ受容されたことは時間軸を基にした検討によって確認された。

さて，こうしたさまざまな分野でのオルテガ思想受容の進展は，しかしながら，哲学の分野では他の分野とは異なった進展を見せている。日本におけるオルテガ思想の受容について全体の展望を得た現在，この状況に違和感を感じざるを得ない。なぜならば，オルテガ思想の主要な領域である哲学の分野でこそ，本来，最もその受容が進むであろうと推測されるからである。

オルテガが日本の哲学分野において登場するのは，哲学会が発行する論集に掲載された，1956年のことである。この時，原佑が著した論文[4]は哲学的なアプローチによりオルテガの思想を説くことを意図したものであった。だが，結果として，原はオルテガ思想における哲学的体系の欠如を理由として，その目的を達成できなかった。彼が，「オルテーガが形成した思想を，全面的とは言わず，たとえ重点的にせよ展開してみせるということには，様々な困難がともなうであろう[5]（原文のまま）」，と述べたことが原因かは定かではないが，日本の哲学分野でのオルテガ受容の可能性はこの後，閉ざされることになった。現在，半世紀近くが経とうとしているが，オルテガが哲学会の論集に登場するのはたったこの一回であり，この一回において哲学者としては非なる存在として扱われたのである。すなわち，オルテガ思想受容の進展は日本の哲学分野においては，ほとんど進んでいない，または，受け入れられてさえいない，と考えるのが適切であろう[6]。このように，その分野，本来の研究者たちに受容されていない[7]，という状況はオルテガが受容された，他の分

2）池島重信訳『現代の課題』，p.2.
3）同上，p.3.
4）原佑「ホセ・オルテーガ・イ・ガセットの思想（原題のまま）」.
5）同上，p.2.
6）拙稿，「日本におけるオルテガ研究の進展」では原の論文をもって，日本の哲学分野における認知，と解釈したが，このように考えてみると，本当の意味での認知とはいい難い。
7）当時のドイツ哲学への傾倒から考えればこれは当然のことであるが，逆にみれば，ドイツでオルテガが盛んに受け入れられていたことが日本にオルテガが導入されるきっかけとなったのは間違いない。つまり，ドイツ哲学への傾倒はオルテガ思想の導入の障壁となった一方，こうしたドイツ哲学への傾倒がなければオルテガが日本に導入されることもなかったかもしれない。

野とは大きく異なっている。

それでは，どのようにしてオルテガ思想の受容は哲学の分野において進んだのであろうか。それは，主たる研究分野が，哲学ではない研究者たちによって進められたのである。つまり，オルテガを知り，オルテガに近づき，そして本格的にオルテガの思想を考察するために彼の哲学を学んだ，学際的な研究領域を持つ者たちによって進められた。無論，このような状況は真に哲学分野の進展ととらえられるか，否かの議論の余地を残すものとなるであろうが，筆者としては，オルテガの生・理性主義などをはじめとする哲学面の研究が多数，行われていることから，これらを哲学分野の受容ととらえることは適当と考える。

このように，日本の哲学分野では哲学者として正面から扱われなかったオルテガだが，オルテガを哲学者として真摯に扱った研究者は多い。そうした中でも，研究の出発点を経済学に据え，後に，哲学，社会学，そして社会思想といった分野へとその領域を広げた，オルテガの中心的研究者に西部邁がいる。ここからは経済学者において，オルテガ思想がどのように受容されていったのか，こうした点について考えてみたい。

３．経済学におけるオルテガ思想の受容

経済学におけるオルテガ思想の受容は他の学問領域と比べると限定されたものとなっている。これはオルテガが著したものの中に主として経済学を扱ったものが存在しないためである[8)]。こうした状況の下，オルテガ思想はどのように経済学の分野で受容されたのであろうか。

経済学におけるオルテガ思想の受容，それは西部において始められた。現在では，西部は日本を代表するオルテガ研究者の一人であるが，オルテガ思想の考察をはじめた当初は，主たる研究領域を経済学においていた。その後，哲学，社会学，そして社会思想の領域について研究をすすめ，後に，批評家として，広く一般の人々に自らの思想を問うている。オルテガはこうした際に彼が頻繁に取り上げる人物の一人である。西部の著作において，オルテガの名，もしくはオルテガの思想が語られた機会は数知れない。こうしたことから西部は，他のオルテガ研究者たちとは違い，一般の人々にオルテガの思想を伝搬したという面でその役割は極めて大きい。もし，西部がいなければ日本におけるオルテガの受容は現在とはまったく異なる展開となっていたに違いない。

西部と同様，経済学から多分野へと研究をすすめた佐伯啓思もオルテガ思想の受容が認められる人物である。だが，彼は西部が批評家として活動したのとは違い，研究者としての活動に重きをおいた。そのため，西部のように幾多もの機会をもって一般の人々にオルテガ思想を問うことは行っておらず，その回数は限られている。無論，佐伯が西部ほどオルテガを自分の思想に取り込んだかどうかも活動の姿勢の違いに加えて，考慮しなくてはならないであろう。西部が多角的な研究をすすめる際に積極的にオルテガを受容したのに対して，佐伯のオルテガ思想の受容は大衆論と社会論に限定されている[9)]ことからその差異にも一定の留意が必要となろう。

8)　無論，常に正しい意味での社会の在り方を模索していたオルテガにおいて，経済に関する考察がまったく存在しないことは考えにくい。だが，少なくとも経済を主たるテーマとした論文も著書もないことから，オルテガの中に経済に関する何らかの検討がなされていたかどうかは，残された著作の中から断片的な記述を拾い上げ，考察をすすめるより他はない。こうした点においてはいまだ検討の余地は残されているため，別稿にて試論を展開してみたい。

9)　佐伯啓思『20世紀とは何だったのか』（特に，pp.154-164.），および佐伯啓思「政策論的知識」（特に，pp.191-195.）を参照のこと。

しかしながら，少なくとも両者を通して言えることは経済学の分野において，オルテガは受容の対象となりうることが示されている点である。ただしそれは，経済学がもつ幅広い専門領域の全般にわたるものではなく，西部や佐伯が行ったように，経済学を通して次なる領域へと考察をすすめていく場合，つまりは哲学，社会学，そして社会思想といった分野について検討を加える場合に限られている。

だが，このことは同時に，経済学者がこうした学問領域へと研究をすすめた際，なぜオルテガ思想の受容に辿りついたのか，という根本的な疑問を生む。こうした点について，西部におけるオルテガ思想の受容を考察の対象とすることで明らかにしていきたい。

４．経済学者西部におけるオルテガ思想の受容

西部におけるオルテガ受容の出発点は定かではない。1975年，最初に出版した，『ソシオ・エコノミクス』ではまだオルテガの存在も思想も語られてはいないが，1980年に読売新聞の文化欄への寄稿には，「スペインの哲学者オルテガが大衆社会の『愚劣』さをほぼ余すところなく描いたのは両大戦の中間点においてであった[10]」，との書き出しによって，オルテガと大衆社会の問題が語られている。これが西部がオルテガについて行った，最初の紹介であり，解説である。次いで同年，雑誌『エコノミスト』に掲載された論文[11]では，当時，一般的に語られていた「大衆」の概念を大きく二通りの種類に分けて提示した後，オルテガとの違いについて述べている。それによれば，「ひとつは，教養と財産のないもの，つまり公衆，パブリックでないものを大衆とする見方[12]」であり，「もうひとつの大衆観は政治階級として大衆をみるやり方である[13]」が，「こうした類の大衆観からはっきりと免れている，ないしは免れようと努力しているのは，私のみるところ，オルテガのみである[14]」と述べ，オルテガ思想の独自性について言及している。

最初の出版物から新聞への寄稿までのおよそ五年の間に，西部のうちにオルテガが取り込まれたのか，それともともっと以前から温められていたのか，またはその両方かは明らかとなってはいない。いずれにせよ，この期間のうちに何らかの思想的変遷が西部にあったことだけは間違いない。それは西部自身によって語られる，次の記述からも明らかである。

> 現代における最大のタブー，それは大衆を批判することである。私がなぜこのタブーを侵すようになったか，しかも自分の怯懦と脆弱をよくわかっていながらなぜそうするようになったか，その経緯は定かではない。ただ気分の問題として，自分が大衆化社会状況と折合のつきにくい種類に属するのだということをはっきりと感じた時期と場所だけは，おぼえている。それは一九七八年のことで，そのとき私は英国の小さな村に閉居していた[15]。

この記述によって示されているように，西部は大衆化社会状況に対してある種の違和感とも言うべきものを「はっきりと感じた」わけである。そしてそれは1978年，英国に滞在していた時であると語られているとおり，その一年前に米国で過ごした時期の回顧録には，その後，彼があらゆる場面において展

10）読売新聞，1980年１月９日号.
11）西部邁『経済倫理学序説』，pp.169-189.
12）同上，p.180.
13）同上，p.181.
14）同上，p.181.
15）西部邁『大衆への反逆』，p.296.

開する大衆論に関する記述はまだ見られない[16]。つまり，西部がオルテガに初めてふれた時期は明確に限定できないものの，大衆論の萌芽はここに見てとれる。そして，この萌芽が結実したことが明らかとされるのが次なる記述である。

> 話が急に自分のことに及んで恐縮だが，十五年前，米国と英国にそれぞれ一年暮してこの国に戻ってきたとき，私は現代日本が「歴史上もっとも不幸な時代として浪間に漂っている」こと，そして現代日本人の表情と行動に「優越感と不安感という奇妙な二元性」があることを強く感じた。それ以来なのだ，私がジャーナリズムの場で大衆社会批判をやるようになったのは[17]。

おそらく西部は，英国の前に滞在していた米国で，いち早く大衆が社会の主役となった状況を目の当たりにして，さまざまな想いを巡らせたことであろう。そうした想いが英国留学時に大衆社会への懐疑を生み，帰国とともに憂国の情へ変化した。なぜなら，彼が帰国した時，祖国は「戦後日本が大衆の天国ともいうべきアメリカを真似ることによって獲得したのは，アメリカ人ですら恐れ入るような高度大衆社会[18]」へと変容してしまっていたからだ。

こうして，西部は帰国の翌年からジャーナリズムの場で大衆社会に対する批判を展開していく。そしてその第一歩が先に挙げた新聞への寄稿であった。ここまで検討を進めると，西部がオルテガを受容した時期については，自然な成り行きを基にした一つの仮説を立てることができるだろう。つまり，西部が1978年に大衆社会に対して懐疑を抱いた時から，1980年に大衆社会に対する批判を展開する，この二年のうちにオルテガを受容したと考えるのが自然である。そして，西部がオルテガの何を自らに取り入れたかと言えば，先の引用のとおり，オルテガ独自の大衆の概念について，つまりはオルテガの大衆論についてであった。だが，この受容は文字どおり，西部がオルテガの思想を自らに取り込んだことを意味しており，実はオルテガの思想に最初にふれた時期はそれ以前に遡る。

> 十余年前に，“反逆せる大衆”の野蛮な権力奪取にたいするたった独りの反逆であるこの世紀の書を読んだとき，馬鹿の一人として，私のいらだちは小さくなかった。私も多くの民主主義者にならって，オルテガのことを貴族主義的反動と呼ばんばかりになったし，せいぜいのところ，左右の全体主義に反対する警世家として軽くいなそうとしたのである[19]。

現在ではオルテガ研究の第一人者，もしくはオルテガの最も良き理解者とも言うべき西部であるが，彼が初めてオルテガの思想にふれたのは，大衆社会批判を展開していく，はるか以前のことであった。だが，上記のとおり，西部ははじめからオルテガ思想を受容したのではなく，むしろ嫌悪感をもって，一度，オルテガを葬り去っているのである。そしてその理由となったのが，貴族主義者として大衆を批判するオルテガ，という構図であった。つまり，完全なる誤解である。現在でも，事あるごとに，オルテガが貴族主義者として誤

16）西部邁『蜃気楼の中へ』，pp.3-203.
17）西部邁「文明と成熟―西欧近代の裏街道を往く-11-オルテガ―大衆の正体を発く哲学」，pp.218-219.
18）同上，p.219.
19）西部邁『大衆への反逆』，p.78.

解を受けていることに言及している西部自身が，こうした誤解をしていたことは非常に興味深い。この誤解について，西部の悔悛の情は次のように述べられている。

> こんなふうに思いを入れるのは，少し誇張していえば，ギルティ・コンシャスのせいかもしれない，一昔前の私はオルテガのことをほとんど忌み嫌うといった調子だったのである。ファランヘ党員に愛された貴族主義的反動のイデオローグという巷間のオルテガ像が，恥ずかしくも，私の眼に焼きついていたわけである。読むことと理解することのあいだに真偽とりまぜての自分の生が介在しているのだという自明のこと，それをあらためて知らされたのが私のオルテガ再体験である。つまりもうひとつ誇張していえば，十年かけて，「生はひとつの課題である」というかれの命題を私なりに具体的に生きたという次第である[20]。

以上から西部におけるオルテガ思想の受容について，初期の過程が明らかとなったであろう。ところで，西部のオルテガ思想研究は彼がふたたびオルテガと対峙したと推測される，1978年頃から数年のうちにほぼ完結したと思われる。というのも，西部の著作物には大別して，a）論文，b）研究書，c）雑誌，新聞への寄稿，そしてこれらを何らかのテーマに沿ってひとまとめとした，d）著作集，という四種の型が存在する[21]が，こうした著作物を見ていくと彼がオルテガの思想を丹念に研究した痕跡がみられるのは，『大衆への反逆』が刊行された，1983年頃までであるからだ。この後も西部は著作やジャーナリズムの場でオルテガを取り上げることはあるものの，その内容はすでに1983年以前の著作にみられるものと同一の内容であると言ってよい。無論，彼においてオルテガ思想が熟成されていったことは否定できなくもないが，少なくとも出版された著作物を見るに，こうした推測は妥当性を得るものと考える[22]。つまり，西部において確固たるオルテガ像とオルテガ思想の受容が非常に短い期間のうちに達成されたことは，オルテガの思想を渇望した表れと考えることができるであろう。とは言っても，西部は「オルテガについて言及すべきことはまだたくさん残されている。その世代論，女性論，芸術論などにもふれなければ，彼の思想の全貌はみえてこない[23]」，と述べているように，彼の直線的な興味から離れた部分では，いまだ未開拓な面が数多く残されていることを認めている。

さて，当初は誤解をもってオルテガから離れた西部であったが，彼がオルテガへと戻る動機は何だったのだろうか。西部が大衆社会への懐疑を抱いていたからと言って，その要因を短絡的にオルテガの大衆論へと求めることは，適当ではない。なぜならば，オルテガのみが大衆論を展開したのではなく，また西部も大衆論の系譜を考察した結果[24]，オルテガのみが大衆論を展開したわけではないことを熟知していたからである。

20）同上，p.179.
21）加えて言うならば，西部の著作物は膨大な数に上るものの，出版社を変更した再販物も多く，そうしたものの内容については加筆，修正が行われていない場合がほとんどである。
22）例えば，この後に西部が著した『大衆の病理』では，一見するとオルテガの大衆論についてさらなる研究が行われているように見受けられるが，実は，オルテガの大衆論について研究がすすんだのではなく，大衆論そのものとその系譜について検討が行われている。つまり，オルテガから発展した形での研究はすすめられているが，オルテガの思想自体については研究の進展は認められない。
23）西部邁『大衆への反逆』，p.110.
24）西部邁『経済倫理学序説』，pp.179-180.

西部の数々の寄稿を集めた，『大衆への反逆』に散見する彼のオルテガへの心情には，ふたたびオルテガと向き合った理由について述べられている箇所が一つだけ存在する。それによると，西部がオルテガをふたたび読み直したのは，「眼前の大衆社会にたいするなんとも苦々しい思い，いくら抑制してみてもつのりゆくばかりの嫌悪の情，そうした心理のおもむくところであった[25]」ことが理由であったと述べられている。つまり，西部自身が大衆社会と対峙するために，または自身が完全にそうした社会へと飲み込まれないために，気概の源泉をどこかに求めていたのではないだろうか。そうした時にふたたびオルテガを読み直し，その内容に感嘆して受容へと結びついたものと考えられる。もし，そのような気概を志向しないのであれば，ふたたびオルテガと向き合う必要もなかったはずである。

こうして西部はすでに見たとおり，短期間のうちにオルテガの思想を受容したのであるが，彼の受容の過程を丹念に検討していくと，その内容には二つの面が浮き彫りとなってくる。一方は，哲学を根底とした大衆論をはじめとするオルテガの思想であり，西部も数多くの検討を行っている，いわばオルテガの一般的な受容の形態と言える。他方は，オルテガの姿勢の受容，つまりオルテガの生とそこに息づく精神への共感，そしてこの両方を共有していくという形での受容である。こうした点はそれまでにオルテガを受容した人々と西部は明らかに異なっている。西部以前，オルテガの精神的気高さに魅了された人物[26]はいたものの，共感から共有への過程を経て，オルテガの精神を自らに取り込んだ人物は見受けられない。

では，最後に西部独特とも言える，オルテガの生とそこに息づく精神への共感，そしてこの両方を共有していくという形での受容について考えておきたい。

先に見たとおり，西部は大衆社会に対する懐疑を留学中から抱くようになっていたが，彼の場合，大衆社会，そのものだけが問題ではなかった。西部は，「この高度大衆社会における私自身の存在にかんする憂慮がオルテガの言説と呼応した[27]」と述べているように，大衆社会の只中に位置する自身の存在は，果してどうあるべきかを模索していたのである。そうした時に西部が共感したのが，オルテガの生，つまりはオルテガが身をもって示した，「生きる」ということの実践とその基となる精神である。オルテガを，「みずからの提唱した生の哲学どおりに，危機に直面せる生の一個のドラマティックな課題として引き受けた人であった[28]」と西部が評したのも，オルテガが大衆社会という危機に直面した中にあって，「大衆に迎合することも唯我に自閉することもない[29]」生き方を貫いたことにある。大衆批判を行う一方，新聞などの媒体をもって大衆への啓発活動を行い，決して大衆への働きかけを止めることがなかったオルテガの姿に，西部は大衆社会における知識人の在り方を見たのではないだろうか。

さて，西部におけるオルテガの生とそこに息づく精神への共感は両方を共有していくという形での受容へとつながっていく。すなわち，西部による大衆批判が開始されるのである。西部は，「大衆を批判するのはますます強固なタブーとなりつつあるが，私はその禁

25）西部邁『大衆への反逆』，p.179.
26）オルテガ思想の受容に関する初期段階で言えば，例えば佐野利勝が挙げられる。詳しくは拙稿，「日本におけるオルテガ思想の初期受容　―その過程と要因に関する一考察―」を参照のこと。
27）西部邁『大衆への反逆』，p.78.
28）同上，p.112.
29）同上，p.75.

忌にやすやすと従いたくはない[30]」と述べているように，大衆を批判することの困難さについては十分に理解していた。無論，それはオルテガを通して得られた理解であるが，同時にオルテガが見せた，危機に直面した生の在り方も理解していた。その両方を理解しながら，西部はオルテガの生とそこに息づく精神を身にまとい，大衆社会との戦いに赴くのである。ただし，西部は現実の大衆社会だけではなく，ある時は大衆化が進む状況についても憂慮を述べている。最後に西部を取り巻く，もう一つの大衆化について提示しておく。

> もっと正確にいえば，「優れた審判を自力で発見できない」という意味での大衆人であるのは恥ずかしいことではなくて致し方ないことである。なんといっても先天的能力の限界というものがあるのだからである。恥ずかしいのは，優れた審判を聞こうとも認めようともしないという意味で「反逆せる大衆」になることであろう。卑近な例でいえば，経済学者が経済学者であるのは仕方のないことである。しかしそれを専門主義にまで落として，他分野の優れた成果を一顧だにしなくなるのならば，経済学において大衆の反逆が起こったということである。私がまったくもって苦々しく思う大衆化状況とは，さしあたりは，億の数の民人にかんする話ではなく，自分もさしずめ首まで漬かっているにちがいないこの言論世界の大衆化のことなのである[31]。

５．結論に代えて

本論考では，1933年に始まる日本におけるオルテガ思想の受容について，簡潔に全体を概観した後，経済学における特質について検討を行ってきた。中でも，日本におけるオルテガ研究者として最も重要な役割を果たしてきた，西部邁に焦点を絞り，論を展開してきたが，最後に，この過程で明らかとなった点を要約して本論考の結びとしておきたい。

第一に，経済学者によるオルテガ研究の進展を挙げる前に，今一度，日本におけるオルテガ研究の特殊性について述べておく必要があるだろう。それは，オルテガが本来，受容されて然るべき分野である哲学の領域において，オルテガが取り上げられたことが皆無に近いと言える現状である[32]。また，そうした空白を学際的な研究を行う人々が埋めている現状もまた，特殊と言わざるをえない。

第二に，経済学の分野においてオルテガ思想が受容の対象となりうることが明らかとなった点である。ただしこれは，西部や佐伯を通して検討したように，経済学がもつ幅広い専門領域の全般にわたるものではなく，経済学を通して他の領域へと考察をすすめていく場合に限られている。つまり，経済学のみを対象とした場合，オルテガ思想が受容の余地を残すかどうかは未だ検討を要する。

そして，第三に，経済学者，西部が自らを取り巻く大衆社会に対して懐疑を抱き，そうした状況と対峙するために，オルテガへとその気概の源泉を求め，オルテガの生とそこに息づく精神への共感，そしてこの両方を共有

30）同上，pp.80-81.

31）同上，p.181. なお，同様の事は，別の箇所でも述べられている。すなわち，「私が東京大学を辞めることになったのも，そこにいる教授や助教授の大半が大衆の見本であるように思われたということに端を発している」（西部邁「文明と成熟　オルテガ―大衆の正体を発く哲学」pp.218-219.）。こうした経済学と西部を巡る問題については別稿にて取り扱う。

32）このような現状については，西部の言が誠に言い得て妙である。「私のみるところ，哲学や社会学のほんの一部が関心をよせているとはいえ，オルテガのことを正面からみつめる人は少ない。つまりオルテガは，生の根本形式は孤独であるといったのだが，死後においてもやはり孤独の人である」（西部邁『大衆への反逆』，p.112.）。なお，社会学におけるオルテガ思想の受容については，拙稿，「社会学におけるオルテガ」を参照されたい。

していくという形での受容を行ったことが明らかとなった。この後，西部は積極的に大衆社会批判を行い，その姿勢は現在においても何ら変わることなく続けられている。そのため，われわれは西部において，今なお力強く生き続けるオルテガを感じることができるのである。そして同時に，西部の存在は，われわれの精神のうちにもオルテガを宿すことの選択を突き付けているのである。

参考文献

原　佑「ホセ・オルテーガ・イ・ガセットの思想」『哲学雑誌』71(732)，1956年，pp.1-26.

池島重信訳『現代の課題』刀江書院，1937年.

木下智統「日本におけるオルテガ思想の初期受容―その過程と要因に関する一考察―」『金城学院大学論集』社会科学編 9 (1)，2012年，pp.130-139.

――――「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集』社会科学編9(2)，2013年，pp.94-101.

――――「社会学におけるオルテガ」『金城学院大学論集』社会科学編10(2)，2014年，pp.150-159.

西部　邁『蜃気楼の中へ 遅ればせのアメリカ体験』日本評論社，1979年.

――――「80年代を生きる」読売新聞，1980年 1 月 9 日号夕刊.

――――『経済倫理学序説』中央公論社，1983年.

――――『大衆への反逆』文藝春秋，1983年.

――――『大衆の病理』日本放送出版協会, 1987年.

――――「文明と成熟―西欧近代の裏街道を往く -11-オルテガ―大衆の正体を発く哲学」『諸君』27(2)，1995年，pp.213-221.

佐伯啓思「政策論的知識論　―高度市場社会における知識と政策」『中央公論』11(1)，1987年，pp.174-198.

――――『20世紀とは何だったのか：「西欧近代」の帰結』PHP研究所，2004年.